

# 『今月の天候と農作業』

通巻第5607号  
9月号  
平成29年8月31日発行  
宮崎県  
宮崎地方気象台



## 【特に注意を要する事項】

期間の前半は気温がかなり高くなる見込みです。

## 【予報のポイント】

暖かい空気に覆われやすく、向こう1か月の気温は高いでしょう。特に、期間の前半は気温がかなり高くなる見込みです。

## 【確率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	10	30	60
降水量	九州南部	30	40	30
日照時間	九州南部	30	40	30

## 【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は高い確率60%です。

週別の気温は、1週目は高い確率50%です。2週目は高い確率60%です。3～4週目は、高い確率50%です。

### <1 週目の予報> 9月2日(土)～9月8日(金)

期間の前半は高気圧に覆われて晴れますが、後半は前線や湿った空気の影響で雲が広がりやすいでしょう。

※明日から1週間の、日別の天気や気温などは、

週間天気予報 (<http://www.jma.go.jp/jp/week/>) を参照してください。

### <2 週目の予報> 9月9日(土)～9月15日(金)

前線や湿った空気の影響を受けやすく、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

### <3 週目から4週目の予報> 9月16日(土)～9月29日(金)

高気圧に覆われやすく、平年に比べ晴れの日が多いでしょう。

## 普通作物

### ◆普通期水稻

---

#### 1 病害虫防除

穂いもちの防除は出穂前と穂揃期頃に必ず行います。葉色が濃いほ場は特に注意が必要です。カメムシは注意報が出ており、穂揃期とその7～10日後の2回防除を基本に、その後も発生が多い場合は追加防除を行います。トビイロウンカも防除情報が出ており、今後の発生予察情報に注意するとともにほ場毎に株元をよく観察しましょう。

#### 2 水管理

根の活力を維持し、登熟を良くするために収穫の5日前迄間断かん水を続けます。この間は落水時でも土が乾くことがないように湿潤状態を保ちます。台風時は深水で倒伏軽減を図り、台風通過後も吹き返しの高温・乾燥風により品質低下が起こる場合もあるので、風が止むまでは水を保ちます。倒伏した際、粃が水面に接すると発芽しやすいので、穂先を隣の株上に乗せませす。

#### 3 収穫

早いところでは中旬頃から収穫作業が始まります。収穫適期は粃全体の8割程度が黄化した頃です。乾燥調製は高温での急激な乾燥にならないように注意し、仕上げの玄米水分は、14.6～15%となるようにします。

### ◆大豆

---

湿害防止のため、ほ場周囲や畦間の排水溝を整備します。開花期以降は紫斑病やカメムシの防除を行います。ハスモンヨトウは老齢幼虫になると薬剤の防除効果も劣るので、観察に努め、早めに防除を行います。特に、孵化後間もない幼虫が食害した際に発生する白く透けた葉を見つけた場合は、幼虫が周囲に広がる前に摘み取り処分することも効果的です。

### ◆そば

---

#### 1 排水対策

そばは湿害に弱く、長時間帯水や冠水すると生育不良や立枯れが発生するので、排水溝を設け、生育期間中も排水を徹底します。

(荒砂 英人)

## 施設野菜

### ◆共通事項

---

施設野菜では定植が始まります。育苗期の後半は、鉢ずらしを行ない、がっちりした苗に仕上げます。鉢ずらし後は乾燥しやすいので、かん水不足に注意します。

適期定植によるスムーズな活着が最も重要です。台風や降雨の多い時期となるため、ハウスの定植準備は計画的に行います。

定植の5～7日前にかん水チューブ等を利用し、畦全体が湿るようにかん水します。定植直後は活着を促進するため、株元を中心に丁寧にかん水します。なお、定植前のかん水量が不足すると根張りが不十分となり生育や収量に大きく影響するため、特に1年を通して被覆されているほ場では注意が必要となります。

### ◆きゅうり

---

ハウス抑制栽培の定植期ですが、定植後から収穫開始期までの管理で草姿は決まります。根を十分に張らせ、コンパクトな草姿に仕上げることが、収量・品質向上につながるため、定植後は株元中心に手かん水を行い、活着後はかん水を控えて徒長しないようにします。また、定植の早いものは、主枝の摘心期となりますが、摘心を行う1週間前には追肥を行い、初期の草勢維持を図ります。

### ◆ピーマン

---

接木栽培では、自根栽培に比べて草勢がやや弱くなる傾向があるため、通常（12cmポット苗）よりも2週間程度早めに定植を行います。かん水についても定植後から収穫開始時期までは、かん水量を3～4割増やす等、草勢を強めに保つことが必要です。

### ◆トマト

---

促成栽培の大玉トマト、ミニトマトの定植期です。セル苗を2次育苗せず直接定植するダイレクトセル苗定植が増えています。異常茎（メガネ）の発生を抑制するため、定植後にかん水量を制限する管理が行われていますが、極端な水切りは初期生育に悪い影響を及ぼすので、少なめのかん水量で回数を多く施用します。

### ◆いちご

---

さがほのかは、花芽分化に対する窒素濃度や苗令等の影響が少なく、花芽分化が揃って早いのが特徴です。

ポット苗の花芽分化期は9月10日頃なので、その2～3日前から検鏡を行います。花芽分化を確認してから9月中旬以降に定植します。

（黒木 正晶）

## 葉茎菜類及びいも類

9月はキャベツ、はくさいの定植や、ほうれんそう、だいこん、ごぼう、にんじん等の播種期です。排水性の良い、地力の高いほ場を選び、植え付け時に適度なかん水を行い、発芽揃いや初期生育を促すことが重要です。

生育初期はネキリムシ等の被害を受けやすく、蝶目害虫や甲虫類の食害や雑草の発生も多いので防除対策は重要です。

### ◆にんじん

---

8月播種したものは間引きの時期です。株間は8cm程度を目安に年内出荷はやや広めに、年明け出荷はやや狭くして有効株数を確保し、収量アップを図ります。干ばつによる発芽不良や大雨による土壌や種子の流失で欠株が多い場合は、まき直しを行います。地域によりやや差はありますが、遅くても9月20日頃までが播種期の限界となります。

### ◆ほうれんそう

---

加工用のほうれんそうは下旬より播種適期となります。大柄に生育させるためには、排水の良い、肥沃なほ場を選定します。土壌酸度は石灰資材を施用してpH7を目標に調整します。播種後、除草剤を処理しますが、土壌が乾燥しすぎると除草剤の効果が劣るので、播種前に適度なかん水を行い、適湿の状態除草剤を散布します。

### ◆食用かんしょ

---

普通堀りの収穫期です。生育日数が130日以上になるといもの形や皮色が悪くなります。鱗翅目幼虫（ハスモンヨトウ、ナカジロシタバ等）が多発しやすいので、若齢幼虫期を逃さず農薬防除を行います。

### ◆さといも疫病対策（次作）

---

疫病の伝染環を絶つため、収穫が終わったさといもの畑は速やかに片付けます。残さの分解を進めるため、トラクタ速度を遅く、ロータリー回転を早くし、できるだけ細かく破碎します。また、残さを畑付近の空き地に放棄することは決してしないでください。

（杉村 幸代）

# 果 樹

## 1 常緑果樹

---

### ◆温州みかん

極早生温州みかんの収穫が始まります。収穫は樹上選果を行いながら、着色や果汁成分等は地域の基準に基づいた出荷を行いましょう。

収穫後、秋期の気温が高く推移する場合には、特に収穫が早い園では秋枝が発生し、翌年の着花に悪影響を及ぼす事があります。9月中旬までに収穫を終える園地では、10月以降、秋枝が発芽しなくなってからマルチの除去やかん水などを実施しましょう。

### ◆完熟きんかん

今年は、地域やハウスによって差はありますが、昨年に比べると6月下旬から7月上旬の早い花の結実が少ないようです。良好な初期肥大を確保するため、9月末までに摘果を終了しましょう。

結実が遅く果実肥大が遅れている園や夜温が早く低下する中山間地域では、9月下旬～10月上旬にビニル被覆を行い、昼間の高温管理と夜間の加温（外気温よりも3℃程度高い温度）により、肥大を確保しましょう。

### ◆マンゴー

今年は特に後期出荷作型で収穫・剪定が遅れたことによる、生育遅れが見られます。枝の緑化の遅れは花芽分化や収量に悪影響を及ぼします。葉面散布で早期緑化を図りましょう。剪定が遅れた園では、剪定直後から夜間の加温や早朝及び夕方の保温を行い、新梢の発生・緑化を促進しましょう。

9月になると日射量は真夏よりも大幅に少なくなります。内カーテンや遮光カーテンを開放し、十分な日照を確保しましょう。

## 2 落葉果樹

---

### ◆くり

ほとんどの品種が収穫時期を迎えます。収穫・出荷に当たっては、早朝に収穫することで品温を低く保ち、鮮度保持を図りましょう。また、家庭選別を徹底し、実炭疽病や害虫による被害果の混入を防止しましょう。

(鈴木 美里)

## 花 き

### ◆秋ギク

---

「神馬66-4」の10月出荷作型の再電照は総苞りん片形成後期から4日間実施します。目安は消灯後12～14日後ですが、農業改良普及センターまたはJAにおいて「花芽分化の検鏡」を必ず行った上で実施してください。

直挿しする穂は、節間伸長や生育の揃いを良くするために2～4℃で3週間程度冷蔵を行います。

また、高温を経過したキクの穂を使用する作型については、電照期間中の低温遭遇によって開花遅延（ロゼット化）を起こす場合があります。今年は特に夏季が高温傾向でしたので、年末出荷作型においては栄養生長期中に低温に遭遇しないように気温の確保に努めましょう。

### ◆スイートピー

---

冷蔵が終了した種子は、活着不良を避けるために遅くとも出庫後3日までには植え付けましょう。また、植え付けから1週間は乾燥しないように綿密な水管理を行い、その後は徐々に、かん水間隔を広げて根の張りを良くします。

植え付け時期の遮光は植え付け前から実施し、植え付け後7～10日は遮熱性の高い遮光資材で終日遮光し、その後は天候に応じた遮光を行い、生育を見ながら除去します。

### ◆デルフィニウム

---

沿海地域の年内出荷作型の定植期です。早期抽だいを防ぐために定植前に遮光するとともに十分にかん水を行います。

中山間地域で8月上・中旬に定植した作型では伸長～発蕾時期です。抽だい後は約2週間は硝酸カルシウム等の液肥を定期的に施用し、株の充実と茎の硬化を図ります。

### ◆トルコギキョウ

---

平坦地では年内から年明け出荷の定植期です。苗は定植前に極端に乾燥させたり、高温に遭遇させたりするとロゼットを起こす場合があるので、すみやかに定植します。定植するハウスの土壌は十分に水分を含んだ状態で定植し、適度にかん水を行ってください。高温の影響を避けるために定植前から遮光します。

### ◆キイチゴ

---

気温の低下とともに腋芽や新しい枝の伸長が盛んになります。また、ハスモンヨトウ等のチョウ目害虫の発生が増えるため、フェロモン剤の利用や定期的な防除を行い、品質を高め、安定的な出荷を目指します。

また、枝は全て収穫せず、一部は来年度に向けた株養成のために必ず残します。

## ◆ホオズキ

---

白絹病やその他の立ち枯れ病、ウイルスが発生したほ場では、出来る限り残さをほ場外に持ち出して焼却します。ほ場に残った細かな残さは、分解資材を散布し、気温が高いうちに耕うんの繰り返しと適湿な土壌水分管理で残さの分解を十分に進めましょう。

(中村 広)

## 畜 産

### ◆家畜

---

今月は季節の変わり目で、気温の日較差が大きくなる時期です。また、台風の襲来も予想されるため、防風対策等の十分な対策が必要です。さらに、暑熱の影響による受胎成績の低下も懸念されることから、暑さで体力の落ちた家畜の回復を図るようにしましょう。昼は畜舎への風通りを良くするとともに、換気扇や細霧装置を稼働し、暑さ対策を行います。夜間は急に気温が下がるので、気温差で家畜が体調を崩さないように、温度管理を適切に行いましょう。

乳牛に関しては、ヒートストレスメーターの温湿度指数（THI）を毎日確認し、THI値が67以上の場合、牛舎ファンを常に回し、牛体に風が当たるよう対策を行います。

豚では、夏期の暑熱による受胎率の低下がみられる時期のため、交配期の豚の体調管理と日々の観察を徹底し、受胎成績の改善を図りましょう。また、豚や鶏の病気が発生しやすい時期のため、観察を徹底して疾病の早期発見に努め、早めの対策を行いましょう。

飼養管理の重要事項として、飲水の再点検を行います。特に、水道水を利用していない農場では、水質の悪化が疾病発生の一因となるので、こまめな給水器の清掃に心がけ、新鮮な水が飲めるようにしましょう。

### ◆飼料作物

---

粗飼料では、台風の襲来が危惧されますが、天候にあわせた収穫作業を行い、良質粗飼料の確保に努めましょう。また、年内収穫のエン麦の作付け時期ですので、計画的な作付け作業を行いましょう。

(三角 久志)

## 工芸作物

### ◆茶

---

本年は一番茶の遅れから、8月の作業も5日程度遅れています。これからの作業は、翌年の一番茶収量と品質確保に大変重要です。こまめに茶園を巡回し、作業遅れとならないよう適期に適切な管理を行きましょう。

#### 1 秋肥の施用と土づくり

秋肥は9月上旬までには施用しましょう。秋肥の施用時期が遅れると耐寒性が低下し、秋冬期の急激な低温により、寒害(幹割れ・越冬芽の凍害等)を受けやすくなります。また、土壌が固く根量が少ない茶園では、9月上旬までに10a当たり堆肥1～2トンを施用し、軽く耕うんを行きましょう。さらに、今年中切り更新した茶園を除き計画的な深耕を行うと、発根が促進され肥効率向上にもつながります。

#### 2 病害虫の防除

秋芽が硬化していない茶園では、連続した降雨等により葉の濡れ時間が長くなると炭疽病やもち病が多発します。一葉期頃に予防効果の高い薬剤を、三葉期頃に治療効果の高い薬剤を散布します。網もち病の多発が予想される際は、四～五葉期に治療効果のある薬剤を追加散布します。

秋期に多発するチャノミドリヒメヨコバイやチャノキイロアザミウマ、カンザワハダニ等の吸汁性害虫やハマキムシ類についても茶園をよく観察し適期防除に努めましょう。

県内の茶園では、チャトゲコナジラミの発生が徐々に拡大しています。この害虫は、成虫が茶園を飛び回るので、茶園を注意深く観察しましょう。なお、本虫に対する問い合わせや見慣れない虫を発見した際は最寄りの農業改良普及センター等へ連絡してください。

(黒木 清人)

### ◆しいたけ

---

#### 1 原基(げんき)づくり

9～10月は、しいたけのもととなる原基の形成が盛んな時期で、今後のしいたけ発生量に大きく影響します。原基は20℃前後の気温で最もよくできます。

原基の形成促進のために、十分な散水とほだ倒しを行います。原基固定期間(中低温菌:9月下旬～)は、ほた木の移動、天地返し、古ほだ整理を行わず、天地返しは9月中旬までに終了してください。

#### 2 ほだ場の準備

秋以降のほだ起こしに備えて、ほだ場の選定と整理が必要です。ほだ場は、南～東南斜面(暖かい方向)で排水が良く適度な湿度が確保できる場所、日光が十分に差し込む林内、散水施設のための水源があるところが適しています。スギやヒノキ林のほだ場では、間伐や枝打ちを行い、光や降雨の入りやすい環境にしましょう。

(永野 学)



## ◆たばこ

---

今月の作業は、通常期販売に向けての出荷規格の確認と来年作に向けた準備が主な作業となります。

- 1 出荷前には必ず最終確認として、異物・異臭・水分の確認と土砂付着や腐れ等の手入不足がないか出荷包の確認を行いましょう。あわせて販売見込表を作成してください。また、普通系に色損系（グレー葉・汚れ葉等）が混入していないか確認を行い、混入している場合はピッキングを行いましょう。

貯蔵害虫については、成虫や食害痕、排泄物がないか確認を行いましょう。発生を確認した場合は速やかに耕作組合へ連絡し、適切な処置を行ってください。

確認作業は晴天日に行い、吸湿による品質低下に注意しましょう。

- 2 良質堆肥は10畝当たり1,200kg以上の使用へ向けて、堆肥の材料を十分に確保しましょう。また、未熟堆肥投入を避けるためにも定期的に切返しを行い、腐熟促進を図りましょう。
- 3 病害の耕種的防除の徹底を図るためにも夏期耕耘（最低深耕1回・耕耘2回以上）を行い立枯病等、土壌中の病原菌密度低減や土作りに努めましょう。  
また、土壌改良や肥料設計の参考にするために土壌検定を行いましょう。

（宮崎県たばこ耕作組合）

## 内容の詳細について

---

9月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県農業経営支援課及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病虫害の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ。

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。  
(<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>)

## 向こう1カ月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

農作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
普通期水稻	穂いもち	やや少	葉いもちの発生は、発生面積率・程度ともに平年よりやや少ない状況です。 穂ばらみ期以降は稲体の抵抗性が弱まり、紋枯病が上位葉鞘へ進展しやすいので、発生程度の高いほ場は注意が必要です。
	紋枯病	並	
	トビイロウンカ (秋ウンカ)	並	トビイロウンカの発生は、平年並みとなっています。9月の気温は平年より高いと予想されており、今後の天候次第では増殖率が高まることと予想されます。現在、低密度のほ場でも定期的にはほ場を観察し、注意します。
大豆及び野菜類	斑点米カメムシ類 ※※	多	今年は斑点米カメムシの発生が多い状況です。等級低下につながりますので、穂揃期とその7～10日後の2回防除を徹底してください。残存虫が多い場合は収穫前使用日数等に注意して追加防除します。
	ハスモンヨトウ等チョウ目 (鱗翅目)害虫	やや多	中齢以降の幼虫に対しては薬剤が効きにくくなりますので、早期発見に努め若齢幼虫期に防除します。施設栽培では施設開口部に防虫ネットを設置し、成虫の飛来を防止します。
施設果菜類	ウイルス媒介虫 (アブラムシ類、アザミウマ類、タバココナジラミ類等)	—	アブラムシ類やアザミウマ類およびタバココナジラミ類により媒介される種々のウイルス病は、生育初期に感染すると大きな被害をもたらします。媒介虫に対して、施設開口部への防虫ネット設置や定植時の粒剤施用など総合的な防除対策に努め徹底防除します。
	キュウリ黄化えそ病 (MYSV)	—	タバコアザミウマによって媒介されるキュウリ黄化えそ病(MYSV)の発生が拡大していることから注意が必要です。発病株は伝染源となりますので、速やかに抜き取ります。
促成いちご	炭疽病	—	苗からの持ち込みによる発生が見られるので、定植前に防除を徹底します。また、苗床で発病を確認したら、周囲の株(半径3ポット)も感染株と見なして廃棄し、健全苗のみ定植します。
さといも	疫病	—	各地で発生が確認されています。早生品種では、次作の発病防止のため、適期収穫と残渣のほ場外への持ち出しを行い、中生および晩生品種では、登録薬剤による定期防除に努めます。
果樹全般	果樹カメムシ類	—	うんしゅうみかんでは、着色期の加害は落果を生じやすいので、園内外を見回り、早期発見・早期防除に努めます。
カンキツ類	黒点病	やや少	降水量が少なくても1ヶ月毎の防除を実施します。
	カンハダニ チャノキアザミウマ	並 並	カンハダニは、平年並の発生です。寄生葉率30%または1葉あたり虫数0.5～1頭の発生初期に防除を行います。
茶	炭疽病	やや少	炭疽病は、秋芽の生育期に降雨が続く場合には、生育初期から7日間隔で2～3回防除します。 輪斑病は新梢枯死症の原因となりますので、輪斑病の多発ほ場では秋芽の萌芽期～2葉期に防除を行います。
	輪斑病	並	
	カンザワハダニ チャノコカクモンハマキ チャハマキ チャノホカ チャノキアザミウマ チャノミドリヒメコバエ クワシロカイガラムシ	やや少 並 並 やや少 並 並 並	カンザワハダニは、低密度での防除に努めるとともに、薬剤感受性の低下を避けるため、系統の異なる薬剤をローテーションで使用します。 チャノホカは例年9月以降に増加し、また、この時期は秋芽の伸長期であるので、今後の発生に注意します。 チャノキアザミウマのこの時期の発生は、卵・幼虫・蛹・成虫が混在し、卵と蛹には農薬がかかりにくく防除が困難です。秋芽の1～2葉期の被害防止に防除の重点をおき、多発時には5～7日間隔で、2回の薬剤散布が必要です。

1) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。

2) ※※は注意報を発表中です。詳しくはホームページをご覧ください。病害虫防除・肥料検査センターホームページアドレスは、<http://www.jpnp.ne.jp/miyazaki>です。

